

日本の戦跡と歴史認識

—京都の軍事施設を事例に—

ジャスティン・アウケマ*

要 旨

本稿は、戦跡や戦争遺跡の変遷に着目することで、戦後日本におけるアジア・太平洋戦争に対する歴史認識とその変遷を検討することを目的としている。そのため、京都市伏見区の代表的な戦争遺跡のひとつである旧陸軍第十六師団の衛戍地とその関連施設に焦点を当てる。第十六師団は1907年に京都に移って以来、1937年の南京大虐殺という暗部を含め、アジア・太平洋戦争の中心を務めた。第十六師団の土地と関連施設は、戦後の日本において学校や住宅地として再利用された他、元軍人や遺族によって旧日本軍の記念、及び顕彰する対象となってきた。しかしその過程において、第十六師団が持つ暗い過去やアジアの人々に与えた被害などについては忘れられ、または控えめに扱われた。一方で1980年代になると、市民活動家や歴史家は南京大虐殺を含め、第十六師団の関連施設を通して戦争の残酷さについて語ろうとしてきた。ところが、これらの運動は他の第十六師団関連施設へのステークホルダーによって厳しく反対された。その結果、その場所において第十六師団をどう記憶し、どう語るべきか未だに議論され続けている。本論文はこのような状況に対して、戦争や残虐行為にまつわる旧軍事施設を地域の歴史やアイデンティティーに盛り込む重要さと難しさを考察した。

キーワード：戦争遺跡、第十六師団、東史郎、南京大虐殺、京都、遺産

はじめに

「京都」と聞いたら、「清水寺」や「嵐山」を思い浮かべる人が多い反面、「戦争」はなかなかピンとこないだろう。また、行政も「世界の文化首都」である「古京」というイメージを積極的に強調してきたため、その傾向は

* 京都女子大学 助教

一層強い。ただし実際には、京都は戦争との長い歴史と深い関係を持っている。例えば、明治期から陸軍第十六師団が京都の伏見区に置かれたことによって、京都は様々な軍幹部の指揮者が京都に滞在することになった上、京都出身の兵士がアジア・太平洋戦争における主たる場面や合戦に参加することになった。数多くはないが、これらの歴史を取り扱っている博物館や先行研究があり、全く知られていないことではない。さらに、戦争体験者が少なくなりつつある中、京都に所在する「戦争遺跡」(戦跡)も注目されるようになっていった。例えば、池田一郎編『京都の「戦争遺跡」をめぐる』(1991年)や戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会編『語りつく京都の戦争と平和』(2010年)など、京都の戦争遺跡に焦点を当ててきた先行研究がその一例である。にも関わらず、京都市の観光データを見れば、戦争遺跡は完全に視野外となっている¹⁾。それどころか、京都はかつて軍都であったこと自体、社会においてほぼ知られていない状況と言えよう。この状況を受け、『朝日新聞』は1999年に「歴史の長い京都。戦争遺跡の比重は相対的に軽い」と指摘した²⁾。

京都の戦争遺跡は何故未だにあまり知られていないのだろうか。本論文は京都の代表的な戦争遺跡である第十六師団関連施設の歴史に着目し、その理由を探る。戦争にかかわる施設や遺跡と言っても、そこに生きていた人々が生活をしてきたことは間違いない。そのため、本論文は第十六師団の元指揮官や兵士の記録を中心に、戦争当事者の像に迫っていく。その中で、軍隊生活の記述についての様々な思いに加え、第十六師団が1937年の南京大虐殺、及び1944年のレイテ戦に参加した

ことについての記録は一つの大きな焦点となってきた。また、戦後直後第十六師団関連施設が聖母女学院や京都教育大学、龍谷大学などとして生まれ変わり、かつての軍都は学園都市へと完全に姿を変えた。とはいえ、その中で以前と同じように南京大虐殺との関係が十分に処理されず、大きな問題として残されてきた。

上述の歴史的研究方法を踏まえ、京都の歴史の中に第十六師団関連施設の曖昧な位置づけの裏にある要因について検討することができる。一つは、必ず残酷行為をもたらす戦争を記憶し、遺産として残すのは決して簡単なことではないということである³⁾。歴史的記憶や遺産は、人々のアイデンティティを構築させるものであるが所以に、双方において過去を固定的に捉えることがほとんどである。その反面、戦争にまつわる痛ましい記憶や過去の暗部を明確にする「負の遺産」の多くは忘れられがちとも言える。もう一つは、記憶や遺産、そして戦争遺跡に対する見方や視点は、常に変化してゆくものということである⁴⁾。この意味では、戦跡は、いわば日本におけるアジア・太平洋戦争にまつわる歴史認識の変遷を理解するためのバロメーターのようなものである。したがって、現在京都における第十六師団関連施設の曖昧な評価は、すなわち日本における戦争記憶の複雑な位置づけそのものについて示している。

1. 「戦跡」に関する先行研究と第十六師団の位置づけ

「戦跡」という単語と概念が初めて登場したのは日露戦争の時であった。その際に、例え

ば高媛が明確にしていたように、満州に所在する戦跡やかつての戦場は、のちに満州に拡大する大日本帝国と支配権を正当化するため、また、軍拡や軍国主義への人々の支持を高めるために利用された⁵⁾。加えて、高媛が指摘した通り、特に政府や軍が支援した満州戦跡への修学旅行を通して、日本臣民に「帝国の輪郭」を確認させる狙いが同時にあった。さらに、一ノ瀬俊也も指摘しているように、1920年代に政府や軍関係者が中心メンバーとなっていた「満州戦跡保存会」が各満州戦跡において日本軍の過去の犠牲を大いに褒め称える記念碑を建設し、日本臣民の愛国心を図ると共に、海外発信への支配の「正当性」を訴えていた。一ノ瀬俊也曰く、当時の戦跡は「ユニークな総動員のありかた」であって「総力戦への不安を払拭し、未来の戦争の勝利を保証、挺身を鼓舞してくれる活きた史跡」であった⁶⁾。

一方、大日本帝国の衰退や日本の1945年の敗戦に伴って、戦跡が今まで持っていた軍国主義的な目的や色合いが次第に不可能な矛盾と時代錯誤の産物となっていった。その代わりに、「戦跡巡拝」や「戦跡訪問」という、元軍関係者や兵士の遺族による慰霊記念行事がアジア太平洋各地の戦跡、とりわけ沖縄やフィリピンというかつての激戦地となっていた場所において始まった。そこでは、遺族たちが未回収となっていた、海外戦地に眠っていたおよそ240万の日本戦没者の「遺骨収集」が行われたほか、慰霊祭や慰霊碑が建設された。

そして、福間良明が指摘したように、特に1960年代において、沖縄の摩文仁周辺の戦跡において記念碑建設ブームが起こった⁷⁾。そのうちの多くが、過去の戦いを美化した上、

日本本土への返還という政治的な目標やニュアンスを含めていたことも確認されている。同様に、中野聡が指摘した通り、フィリピン所在の戦跡においても遺族による同じ傾向が確認され、とりわけ1973年に日本政府が率先して建設していた戦没記念碑においては、日本人戦没者のみが祀られ、戦争への反省はほとんどみられなかった⁸⁾。そして、日本国内でもこれらの記念碑建設ブームが生じたことは、吉田裕が注目している。吉田によれば、その多くが「英霊を顕彰する」ことが目的で、また、その碑文は戦時中の大本営発表に比べてさほど差がないことを指摘した⁹⁾。

しかし1980年代以降、戦争に対する歴史認識の大いなる変容がみられるようになった。その主な理由は、戦争派の高齢化と戦争体験と記憶の「風化」に対する悩みであった。この背景において、元兵士の戦争体験や民間人の空襲体験などを中心とする戦争体験記録運動が次第に増加した。同時に、ベトナム戦争に対する反戦運動を始め、1972年の日中外交正常化、1987年の韓国の民主化など、様々な地域政治学的な変化があった中、日本の侵略戦争がいかにアジア諸国民に被害をもたらしたのかについては、もはや直面せざるを得なくなった。その中で、例えば本多勝一の『中国の旅』(1971)、『沖縄県史第9巻沖縄戦記録』(1971年)、『東京大空襲・戦災誌都民の空襲体験記録集』(1973年)、森村誠一の『悪魔の飽食』(1982年)、そして元従軍慰安婦だった金学順の日本政府への訴訟とその体験(1991年)などがあったように、日本の戦争責任を厳しく追求する、アジア諸国民や日本の民間人・元兵士などから次々と現れていった。

この文脈において、戦跡に対する認識は次

第に変化していった。まず、日本各地に戦争遺跡の保存を求める市民団体が増えつつあった中、そのほとんどが戦跡見学や戦争体験を通して、後世代に追体験をさせ、戦争記憶の継承を図っていった。加えて、朝鮮・中国人の強制労働や慰安婦との関係、日本軍による様々な残虐行為などの発掘によって、戦跡を通して日本の戦争責任を厳しく追求していたことが多かった。その中で、例えば俊彦萩原による「反戦と平和のための戦跡めぐり(科学運動通信)」（1988年）や大日方悦夫の「戦跡保存運動を考える：「戦争遺跡」保存の意義と課題—松代大本営跡の「史跡」指定問題を巡って」（1993年）がそのわずかな一部であり、また、主に空襲体験を中心とする『朝日新聞』の「小さな戦跡からの報告」（1988年）という連載シリーズがあった。さらに、1990年に沖縄県南風原町の陸軍病院壕跡が戦跡として初めての文化財となったことを皮切りに、1995年には広島原爆ドームが国の史跡及びユネスコの世界遺産として登録された。それ以降、1997年に全国各地からの戦跡保存市民団体が戦争遺跡保存全国ネットワークを結成し、現在までに三百件以上の戦跡が文化財登録を得ているという著しい結果をみせている。そして、その関係者の一人であった菊池實が、戦跡に対する認識について、1996年に次のように書いた。

身近な地域の中に埋もれていた戦争遺跡の数々は（省略）戦中・戦後を含むアジア諸国民の癒しがたい苦勞（植民地支配と侵略戦争の被害）に思いを馳せ、心に刻み、過ちを再び犯さないために戦争の実相を伝え、平和の貴さを後世へ継承

する貴重な文化財である¹⁰⁾。

のちに、2002年に菊池と十菱駿武は、全国各地及びアジア諸国に所在する戦跡を紹介、列挙した『しらべる戦争遺跡の辞典』を発売した。加えて、戦跡が独自に持つ「戦後史」に焦点を当てた2015年の福間良明による『「戦跡」の戦後史』が、主な先行研究として挙げられる。

さらに、第十六師団関連施設（戦跡）の場合、本格的歴史研究が始まったのは1980年代からであった。例えば「平和のための京都の戦争展」が実施されるに当たって、大量な歴史的資料や遺品の収集が行われた。その過程において、特に注目すべきなのは東四郎などの元第十六師団所属兵士による、南京虐殺についての記述日記であった。これらの資料が、のちに南京大虐殺についての歴史的研究を後押しにしたことに加え、日本社会全体の歴史認識に大きな波紋を引き起こした。また、それらの研究に踏まえ、池田一郎編『京都の「戦争遺跡」をめぐる』（1991年）や戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会編『語りつぐ京都の戦争と平和』（2010年）など、第十六師団関連史跡に焦点を当てる研究が次第に増えた。

一方、1990年代後半以降には、右翼や歴史修正主義者らによって、日本軍の残虐行為を一切否定する戦争固定論者が同時に増加した。実際には、自ら南京大虐殺に参加したと証言した元第十六師団所属兵士に対しても、激しい嫌がらせや脅迫があり、「刺客を送ったから覚悟しろ」と書いた手紙が届いている¹¹⁾。

また、同じ歴史認識にまつわる問題が日本各地の戦跡においても行われてきた。この背景において、果たして戦跡がたとえ文化財と

して保存されても、そこで記憶された歴史、語られる歴史が実際にどの程度戦争の実相を明確に伝えることができるかは、未だに議論され続けている。

2. 第十六師団関係施設の歴史的背景

第十六師団が京都府紀伊郡深草村（現在京都市伏見区）に訪れたのは、1907年の日露戦争が終わってから間もない時期であった。当時、軍隊の駐屯地として選ばれることは大変名誉なことで、地域経済の発展につながると考えられていたため、当初駐屯地の設置に関し、複数の候補の地域の間で激しい誘致運動が生じた。しかし、歩兵第三八連隊がすでに深草村に設置されていたため、第十六師団の移転先は同じ深草村に決定された。それに従い、1908年に歩兵や騎兵、輜重兵などといった全ての兵種、及び平時において一から二万の総人員で、三六八万平方メートルにも及ぶ広大な軍用地へ移駐した。また、このようにして深草村がすっかり「軍都」に変わり、近くにある藤森駅は「師団前駅」という愛称を



図1：龍谷大学深草キャンパス近くにある、現在の標識。「師団街道」「第一軍道」と記されているように、第十六師団時代からの痕跡が今なお地景に残っている。2020年8月25日筆者撮影



図2：旧第十六師団司令部庁舎。現在、聖母女学院本館。2020年8月25日筆者撮影

得た。さらに、師団の設置時に巨大な練兵場をはじめ、赤煉瓦の師団司令部の建物が設けられた¹²⁾。

日露戦争後、日本が遼東半島を占領し、また、1931年の満州事変を機に、中国北部に占領地域を拡大して、いわゆる「満洲国」を設立した。この過程において、第十六師団は1929年及び1934年のおよそ二回にわたって満洲守備のために派遣された。さらに、1937年の日中戦争の勃発に伴い、師団は再び満洲に派遣され、その後は上海を経て南京戦に参加した。そして、アジア・太平洋戦争の開戦と共に、第十六師団はフィリピン占領を命じられたが、連合軍から予想以上の抵抗を受け、師団の主力となっていた歩兵第二〇連隊がほぼ全滅状態という大きな被害を受けた。その後、約二万の兵力で第十六師団はレイテ島の守備についていたが、1944年10月マッカーサー率いる米軍大隊が上陸した際に、その迎え撃つ戦いとそれに次ぐおよそ二ヶ月におよんだレイテ決戦で、そのほとんどの兵隊が戦没した。これを以て、実質的に第十六師団の歴史が集結した¹³⁾。

その歴史の中で、第十六師団に属していた兵士や人物はどのように物事を捉えただろう

か。その一つの重要な手がかりは1937年8月に福知山歩兵第二十連隊に上等兵として召集された東史郎の陣中日記である。東は、召集令状がきて家族と別れた時について、次のように書いた。

母はいった。「いく万のお金を積んでも行けへん出征やで。喜んでいきや。もし不幸にして支那兵に捕まったら、これで腹を切って死によし。わてには三人も男の子があるのやし、一人位死んでもかまへんのえ」

と、短刀を渡した。これに対して、東は関心を受け、「俺は喜んで死のう」と思ったようである¹⁴⁾。この別れが表しているように、1937年の時点で兵士となる一般の男性は戦死することをある程度覚悟していたことが伺える。

また、東はその後、中国北部にある河北省に到着するまもなく、様々な日本軍による残虐を目撃し、自ら参加することについて細かく書いていた。例えば、1937年10月10日に次のように記している。

昼前、小さな部落で敵とぶつかり交戦したが、これは訳無く退散させた。この部落で目撃した、けものじみた野蛮と地獄絵図の悲惨を、私は忘れない。家々の片隅に住民たちは打ち震え、ちぢこまっていた。「師団長は、女子供にいたるまで殺してしまえと言っている」ということだった。我々は片っぱしから民家に入り、住民をつまみ出してきた。広場には、三十数人の住民が集められ、池面にしゃがんでいる。連隊長・大野大佐が命令し

た。「住民は殺すべし！」敵がいた部落だから、住民は敵に加担し、抗日に燃えているものと断定されたのだ。住民たちは哀願も抵抗もしなかった。逃げようとさえしなかった。彼らは完全に観念していた。「ヤァ!」「トゥ!!」…銃剣で突き刺す気合いが相次いで起こった。悲鳴と喚き、気合いとうめき、断末魔の叫びが交錯した。住民たちの胸から噴き出した血潮は、地面に流れ、もがき苦しむ住民たちの両の目玉がこちらをにらむ(省略)。兵士たちも血しぶきを浴び、地獄の鬼のように様相である。凄惨さを追い払うように、死にもの狂いになって、銃剣を突き立てた。広場は、文字通りの地獄図と化した¹⁵⁾。

実際には、東が記録したこれらの悲惨な場面は決して例外ではなく、むしろ日記の全体を通して幾度も繰り返されている。例えば、南京に侵入した直後、七千人の捕虜が殺害されることなども目撃していた。

しかし、そもそもなぜ中国戦線に派遣された第十六師団の兵士がこのような残虐行為をとることになっていただろうか。日本至上主義や中国人民に対する差別など、東の日記で様々な要因が伺える。さらに、当時の第十六師団は中国において基本的に捕虜を取らないという姿勢をしていたため、場合によって殺害行為が士官の命令によって行われたことも注目しておきたい。実際には、第十六師団が南京戦に参加していたときに、その師団長であった中島今朝吾は日記に「大体捕虜ハセヌ方針ナレバ」と記した¹⁶⁾。

また、東が中国戦線から戻ってくるとすぐ

に、1931年の満州事変の最高責任者と計画者であった石原莞爾が第十六師団の師団長として任命された。その際に石原が執筆した『世界最終戦論』という本が、第十六師団の幹部はもちろんのこと、旧日本軍の戦術思想について非常に示唆的なものとなっている。その中で説明されている石原の考えでは、世界は最終的な決戦戦争に向かいつつあって、その戦争を経て最後に残る陣営は東亜とアメリカのみと予測されていた。そして、そのいわゆる「決戦」に勝つために、日本はアジアにおける完全な支配権を取り、また、凄まじい破壊力を持つ、新しい決戦兵器を開発しなければいけないと論じていた。さらに、その「決戦」に向けて、石原は次のように考えていた。

いよいよ 真の決戦戦争の場合には、忠君愛国の精神で死を決心している軍隊などは有利な目標ではありません。最も弱い人々、最も大事な国家の施設が攻撃目標となります。(省略) 最後の大決勝戦で世界の人口は半分になるかも知れないが、世界は政治的に一つになる。(省略) 世界に残された最後の選手権を持つ者が、最も真面目に最も真剣に戦って、その勝負によって初めて世界統一の指導原理が確立されるでしょう。だから 数十年後に迎えないと私たちが考えている戦争は、全人類の永遠の平和を実現するための、やむを得ない大犠牲であります。(省略) 恐るべき惨虐行為が行なわれるのですが、根本の精神は武道大会に両方の選士が出て来て一生懸命にやるのと同じことでもあります。人類文明の帰着点は、われわれが全能力を発揮して正しく

堂々と争うことによって、神の審判を受けるのです¹⁷⁾。

ここで明確になっているように、石原のビジョンは圧倒的な虚無主義から生まれる絶望的な破壊を導くだけではなく、その世の終末的な過程において「最も弱い人々」が「目標」とされ、「世界の人口」の半分が「大犠牲」となり、また、「恐るべき惨虐行為が行なわれる」とされていた。つまり、東の日記で鮮やかに記録されていた残虐行為、あるいは東のような一般兵士が語る自分の死に対する覚悟などについて、このような軍指導者による思想的な文脈において解釈すべきだと考えられる。

続いて、太平洋戦争の火蓋を切った1941年12月の真珠湾攻撃に伴い、第十六師団はフィリピン攻略に参戦し、その後フィリピン占領を命じられた。その当時のことを明確に記した師団の一般兵士による記録が残っている。その一つの事例をあげれば、例えば下村實の軍隊日記がある。下村は、六人兄弟の長男として1918年に南丹市日吉町に生まれ育った。家は農家で、決して経済的に余裕があったわけではないが、下村自身は教育熱心で教員になるために農家仕事に加えて通信教育を受講しながら、学費を払うために林業の仕事をしていた。下村は召集令状が来てから、1939年1月に第十六師団に入隊し、約二年間の訓練を受けた後、1941年11月にフィリピンへ送られた。そしてフィリピンに到着して約一ヶ月後に下村の小隊が攻撃を受け、23歳の若さで戦死した。下村が入隊してから戦死するまでの三年間の間軍隊日記を忠実に書き、師団の訓練や日常の様子を含めて細かく記録した。

従来、農業に従事し、将来教師を目指していた下村にとっては、入隊直後に新兵が受ける精神訓練や軍人勅諭謹解といったイデオロギー的な要素を持った軍隊の日常は、簡単に慣れないものだったようである。

第一週は何を振り返る暇もなく過ぎ去ってしまい、さほど心臓の強くない俺は一寸慣れぬ生活にしばし振り返る暇もなかった。第二週からやっと共同生活の概況もわかってきて、それから益々身体の続く限りご奉公へ赤誠の下に活動しようとの決意を固めた。理屈は下手、言葉も下手、唯俺には真心によって国に報ゆることには誰にも負けぬ¹⁸⁾。

その後、下村は銃剣や行軍のほか、千葉県での戦車の訓練も受けていた。同じように故郷から離れていた同年兵との交友についても下村は記述している。しかし全体的に、下村にとって軍隊生活は何より寂しいものだったようである。例えば、伏見で駐屯していた際に、兄弟との面談をしたのちに、次のような詩を詠んでいた。

深草の / 野をしのばんと / 十夜月の / 影
に求めば / さびし兵かな
我にある / 大いなる仕事 / 成し遂げて /
よろこびの日の / 遠きものかな
父母の / います故郷 / なかなか / 山里
なれば / 尚恋しかり¹⁹⁾。

また、1941年10月には下村は間も無くフィリピンへ派遣されることがわかった。その際、下村は、自分の死や運命について深く探り、

滅私奉公という観点から意味付けようとした。その中で、軍隊の精神教育を通して育成していた戦死への準備を強く感じ取れる。

二十歳の年末に私は新生をめざし、五年生の時からずっと書き続けていた懐かしい心の記録を川土手にて焼き切りしました。過去の一切を洗うために、また大きな新生の希望にひたりながら。入営以来三年、ここに世の中の財産と名誉とは私には一切不要なものとなりました。が今日に於いても、時折はこの意志の淋しさをつくづく感じ取ることがあります。この淋しさは一日、一ヶ月、一年と続きましたがようやく今、一つの島にたどり着いた感じがします。空想とか、希望とかをあっさりと消し去ったのであります。財力ももう私はまったく要がありません。(省略) 大局の赴くままに「死」の地につくのは当然であります。(省略) これは悲運なことかもしれませんが、私は決して悲しみません。ちょうど嵐に散る花のように、笑って散っていきたいものであります。戦いの中で戦いつつ死んで行きたいものです²⁰⁾。

一方、これは一種の強がりでもあったかもしれない。11月に戦線へ赴く直前には、周りの戦友がすでに戦死している中、下村は次のように語った。

今、私は線に赴くべき命を拝し、目下出発を待命中である。動かすことのできない、しかも絶瘦せない力で迫りくる波である。(省略) それは時代の波である。時代の波という言葉は適當ではない。動

かすことのできない、しかも絶瘦せない力で迫りくる波である²¹⁾。

このようにして、第十六師団の戦争の歴史の一部を、その当事者の日記や残した書物を通して見てきた。そして戦跡との関係に関しては、いうまでもないことだが、第十六師団の関係施設のような場で過ごしていた人間が何をし、どのように物事を捉えていたかということなしには、戦跡の真の意味を理解することはおそらく不可能であると改めて指摘しておきたい。

3. 第十六師団の記憶と関連施設の戦後

次に、第十六師団とその関連施設が戦後においてどのように位置付けられ、記憶させられてきかを検討していきたい。終戦後、旧軍用地の所有権は大蔵省（現在の財務省）に移り、各地域の財務局の管理下に置かれた。さらに、その多くは進駐軍に接収され、依然として軍事基地として使用された。第十六師団関連施設の場合、米軍のキャンプ・フィッシャーとして新たな用途に当たられたが、これは端的なことであり、更なる再利用がすでに日本中央政府や京都府と京都市の間で図られた。そして、1949年にその最初となったのが聖母女学院だった。

聖母女学院が師団の跡地に入るまでの細かい経緯や背景があったが、大まかにまとめると、村上惇府長や大阪財務局に勤めた人たちの支援があったことをはじめ、進駐軍の関西司令部が京都で初めてのカトリック教の学校を設置することに対して好意的であったことが大きな理由であった。当初、聖母女学院が

旧司令部本館のほか、騎兵連隊や師団被服倉庫などを買い取った。聖母女学院関係者や当事者の回想録によると、当時、建物や敷地内が非常に荒れ果てた状態であった反面、そこで学校ができるということについてとても高く評価していたことが伺える。例えば、大阪財務局の坪田翠は次のように語った。

敷地の大部は荒れて草は茫々で、この建物も墨が塗ってあって戦時中の墨の迷彩そのままでした。（省略）外見は悪いが、とにかく丈夫な立派なものがほとんどでした。終戦後二年、三年とたつにつれて、ずいぶん荒れていたのですが、とにかくここが最適ということできめられました²²⁾。

加えて、当時の聖母女学院関係者は強い宗教的な使命感を持っていたことが明らかである。例をあげれば、藤森への移転に関わったマイケル・マキロップ神父は、聖母女学院の設立について、敗戦に伴って「京都を精神的混乱から救う為にカトリック学校が必要である」と述べた²³⁾。「丈夫な立派なもの」にせよ、あるいは宗教的な使命を果たすための手法にせよ、当時の聖母女学院関係者は第十六師団の施設やその歴史に対して、特に悪い印象を持っていなかったことが回想録から伺える。その上、むしろ良いイメージを持っていた人物がいた。例えば、幼い頃深草で育てられ、のちに聖母のシスターとなった下田は、第十六師団について次のように記している。

此の深草は起床ラッパに明け、消灯ラッパで眠りに着く平和な軍隊町でした。

今の聖母は、十六師団司令部で（省略）学校の建物の処は馬場で協会の裏あたりはテニスコート、修道会本部の処は偕行社、その裏は師団長官舎、短大に面した住宅は副官官舎でした。子供には結構な遊び場で、頼めば草花つみなどにいつも入れてくれました。それがいつの間にか入れなくなったのは恐ろしい戦争へ徐々に進んでいたからでしょう。楽しい思い出の一つには各連隊の軍旗祭でこの日ばかりは日頃厳しい軍隊も和気あいあいと無様な飾り付けなどして一般人に公開しました。お隣の深草中学は騎兵隊で、幾棟も立ち並ぶ馬小舎には今の子供は見たこともないぐらい沢山の馬が手入れされており、三月十日の陸軍記念日には晴れ姿を見せてくれました。此の様な平和な姿も次第になくなり、真夜中に密かに戦場に向かって歩いていく軍靴の音を何回か床の中で聞く様になり、そして遂に終戦を迎えました²⁴⁾。

このようにして、下田は第十六師団について懐かしく思い出として回顧している。特に、深草を「平和な軍隊町」として思い描いた上、第十六師団の敷地内で様々な「楽しい思い出」を得たことを語った。しかし一方で、その「平和な姿」が戦争によって切断されたことを不幸に思っているように、下田の認識では軍隊と戦争は表裏一体ではなく、むしろほぼ無関係であったということがわかる。

聖母女学院のほか、第十六師団の跡地は、1957年に京都教育大学、及び1961年からは龍谷大学がそれぞれ残っていた土地の一部を買い取った。その中で、旧軍施設に対する意見

や捉え方は複数存在していたが、良い印象を持った者、あるいは建物を保存しようとする動きはほとんどみられなかった。特に、龍谷大学の関係者のうち、第十六師団の関連施設が大学に戦争体験や犠牲を想起させると述べた者がいた。例えば、『龍谷大学三百五十年史』では、次のように書いてある。

現在の深草学舎の地が本学の戦後の発祥地点となる。（省略）さらに、この深草の地はかつての伏見連隊の跡地であり、そこは若き日の私たちが軍事教練で絞られた悪夢の地でもある²⁵⁾。

同様に、当時の大学関係者は深草キャンパスの「殺風景」を嘆き、「大学の雰囲気乏しい」「非文化的とさえいふべきキャンパス」と表現した²⁶⁾。このような背景において、第十六師団の関連施設が次々と姿を消していった。

このようにして、第十六師団関連施設の間接的継続者であった複数の大学関係者にとっては、第十六師団の歴史に関して複数の異なる意見があった中、その歴史を明確に掘り起こして保存するよりも、戦後復興という、非常に実用的なことを最優先にしていたことは間違いない。しかし一方で、第十六師団の記憶を直接的に継承していた遺族はまた、別の「復興」の意味について悩んでいた。それは、第十六師団所属のおよそ二〇万人の戦没者をいかに記憶すべきかということであった。当時の記録によれば、遺族の間で第十六師団の記憶を保存したいという強い希望を持っていたにも関わらず、関連施設そのものに対する特別な気持ちを持っていたわけではないこと

が伺える。例えば、歩兵二十連隊が置かれた福知山市の遺族会会長で勤めた高木繁太郎が、1953年に次のように記した。

終戦以来八ヶ年を経過致しました今日と雖も、私たち遺族といたしましては、肉親を失った悲しみは消え去るものではございません。消えるどころか、歳月が経てば経つほど痛惜はつるばかりでございます。これは結局肉親の死が敗戦という冷酷な現実のために、国家からも国民からも忘れ去られようとするからであります、このことは肉親を国のために捧げたと信ずる私たち遺族にとりましては堪え難い悲しみなのでございます²⁷⁾。

ただ結局、高木とその福知山の遺族会会員としては、第十六師団の兵士の記憶を保存するための最も適切な方法は戦没者名簿『平和の礎』であった。では、なぜ第十六師団の建物などにあまり興味を示してなかったのだろうか。一つの要因は、それらの戦跡は遺族にとって、悲しみの象徴であったからということが指摘できる。例えば、山陰中央新聞社社長吉田義雄が、同じ『平和の礎』において、かつての「軍都」であった福知山の駅で、多くの若い兵士を送迎していたほか、汽車の汽笛の音と共に「戦地へ向かつて征つた」と記した。しかし、戦後となって、駅や汽車の汽笛でさえ、「軍都」としての歴史は悲しい象徴に変わった。

昭和二十年の終戦以来となるや、郷土の表情は一層悲痛と深刻さを増してきた。還り来るものは皆還り来つたあと、還り来らぬものを—それは死ではあった

が—待つ神たのみに似た切なる哀願は「軍都」という力強い呼称を失った後だけに、一層深刻さを見せたのである。わが子、わが夫、わが兄弟よ、生きてあればかくも嘆きはしないものを…。遺族たちは、悲痛な声をあげて還らぬ肉親を送り出した軍都と名のつく駅頭に起つて、心で泣きじゃくったものである²⁸⁾。

吉田の言葉が示すように、かつて強いイメージを持った「軍都」であったが、戦後に変わってむしろ「心で泣きじゃくったもの」に変容してしたことが明確である。

しかし、戦争関連施設や建物は、例えば辛い思いをさせるものだったとしても、記念碑を建設するという、また別の記憶するための方法があった。本稿の前半で触れたように、1960年代には遺族による記念碑建設ブームが国内外で広まった。そして、第十六師団に関する行事についても、例外ではない。例えば、1968年に、明治百年周年の記念行事に合わせて、旧軍人や遺族の関係者が第十六師団の旧軍用地の片隅にあった藤森神社で「京都歩兵連隊跡」という、高さ2—3メートルくらいの記念碑を建てた。記念碑の文面は、「光輝ある連隊の歴史」として誇らしく第十六師団の戦歴を語っていた。さらに、その関連施設や旧軍用地そのものについても触れていた。

懐かしき兵營の面影も過去の帳のうちに消え去らんとしている。しかしながら、祖国を愛し、祖国を護り、進んで国難に殉じた郷土の部隊の光榮ある歴史と名誉ある伝統とは永遠に後世に伝えられるべきである。(省略) この地を史跡とし先人

戦友の遺勲を顕彰して長くその功を讃え、陣没した幾多の英霊を慰めるとともに、国運の隆盛と世界の平和とを祈念して思い出多き聖域にこの碑を建てるものである²⁹⁾。

この文面でみられるように、第十六師団やその関連施設に対する反省や悪い印象は全くなく、むしろ「懐かし」く思い出していた上、第十六師団の記憶を継承するための重要な「史跡」や「聖域」として捉えていた。このようにして、1960—70年代の間に第十六師団関連施設における記憶は、ある種のナショナリズムとして表された。それはつまり、元兵士の犠牲を記憶する過程において、その犠牲を美化し、正当化した上、軍隊や戦争そのものを懐かしく、あるいは固定的に思い出すという傾向を意味している。



図3：1968年に藤森神社の片隅に建設された京都歩兵聯隊跡の現在の様子。2020年2月28日筆者撮影。

しかし、ベトナム戦争を背景に盛んになっていた戦争体験記録ブームがあった中、遺族

が先頭に立っていたこれらのナショナリズムが一つの重大な矛盾に直面せざるを得なかった。それは、元兵士自身による戦争体験、あるいはそれを詳しく取り上げる報道や書物であった。これらの体験記の多くが、例えば自分と戦友の行動をある程度美化していたとしても、同時に戦争の悲惨さや日本の加害の面をより明確にしていたことは否定できなかった。第十六師団の場合、『京都新聞』記者であった久津間保治による1976年に連続シリーズとして始まった『防人の詩：悲運の京都兵師団証言録』がまさにその傾向をよく表していた。同シリーズは、1941年のフィリピン攻略戦を皮切りに、1944年のインパール作戦などまでの、全ての第十六師団が関わった戦いの分析を通して、第十六師団の兵士がどのような運命に遭ったかを辿っていた。この意味では、いわば第十六師団の戦没者への賛辞として機能していた。しかし一方で、その題名に「悲運」という単語が使われていたように、これは単なる戦争美化に留まらなかった。その点において、序文では次のように記されている。

本書における最大の特徴は、筆者自身の戦争史観が「戦いは特定の筆名な将軍や、いわゆる有能と称せられる提督が主役になったものではない。戦争という辛酸のドラマの主役は、無名の第一線の兵士達である」との視点に置かれていることである。このため、本書は無数の兵士、下士官らが登場し、それは従来の戦記文学に見られた華々しい提督の生涯記や、将軍達の伝記とはまったく視点を異にした、言うなれば無名の主役達の証言を収

録する中で、戦争という強大な殺りくの舞台を見事なまでに再現する異色の構成をみせている³⁰⁾。

つまり、久津間は、一般兵士の証言を中心に置くことによって、その「悲運」及び「戦争という強大な殺りく」の正体を明確に記していた。また、従来までの遺族によるナショナリズムからみれば、第十六師団の戦いは「光栄ある歴史と名誉ある伝統」として描かれていた。しかし、戦後派であった久津間や元兵士にとっては、その歴史を「光栄」と呼ぶことに難があったことは明らかだった。例えば、数多くの兵士の体験が取り上げられた中、久津間は次のように語った。

戦場においては、ただ究極のところ、勝者と敗者しかあり得ない—それが戦場の持つ唯一の素顔であった。そして、勝者には栄光という名の称賛が捧げられ、敗者には「死」以外に、何一つ残されないのが戦場の持つ過酷な運命でもあった。京都において編成された第十六師団はその意味で、マニラ占領までの開戦一週間は「栄光」の師団であり、かつ勝者であった。しかし(省略)それ以来の各戦地での戦闘は、京都編成師団から勝者—「栄光」のふたもじを剥ぎ取り、これに代わって各部隊の将兵達は辛酸のなかに「敗者」—すなわち、生きて再び祖国の土を踏めない戦歴をつづる運命にあった³¹⁾。

この意味では、例えば第十六師団がいかに勇敢に戦ったとしても、二度と生きて帰らな

い戦没者は結局のところ「敗者」に他ならないということ久津間が強く印象付けていた。このようにして、従来第十六師団の関連施設における記念や慰霊行事の際に表されてきたナショナリズムが自らの矛盾によって崩れかけていた。

同時に、『防人の詩』は日本の加害の面についてほとんど触れなかった反面、1980年に入ってから次々に発掘された第十六師団元兵士による南京大虐殺についての記述が大きな波紋を引き起こした。そのきっかけとなったのが、1981年から京都市や『京都新聞』などの支援を得て、様々な地域における大学関係者や学者によって計画されていた、戦争体験記や遺品を中心に展示する平和のための京都の戦争展であった。当時の関係者によると、その戦争展の目的は次の通りである。

かつて日本国民が経験したもっとも大きな戦争であり、いまでもその傷跡を日本国民だけでなく多くのアジア諸国民のなかに残している十五年戦争の真実の姿を全面的に描き出し、語り伝え、そのことを通じて平和の貴さを互いに確認し、現代と未来の平和を築く大きな力を育てて行こうというものです³²⁾。

これに従い、のちに年に一度開催されたこの展示会は、例えば七三一部隊や南京大虐殺などという侵略戦争とアジア諸国民に対する被害を明確にする、非常に批判的で反戦的な視点を持っていた。さらに、その展示品を準備していた中、例えば東四郎や増田六助などの南京大虐殺についての元第十六師団の兵士による記述が新たに発掘された。増田の日記

では、1937年12月14日に「外国租界ニ入り避難民中ニ混リテ居ル敗残兵ノ掃蕩ス。第四中隊ノミニテモ五百人ヲ下ラス。玄武門側ニテ銃殺セリ。各隊ニモ又同シト云ウ」と書かれていた³³⁾。しかし、これらの元兵士の日記を1984年に展示が行われようとしていた際、右翼や歴史修正主義者からの激しい嫌がらせや脅迫を受け、結局展示しないこととなった。

また、戦争展を企画した市民団体が1983年に『語りつぐ京都の戦争』という冊子を出版したのちに、同タイトルのシリーズを本格的に計画し始めた。そのシリーズの最初は、1991年に京都の高校教師池田一郎によって書かれた『京都の「戦争遺跡」をめぐる』という本であった。この本では、京都府各地の戦争遺跡、つまり全ての戦争関連施設や遺跡が初めてそれぞれの歴史的説明に合わせて列挙されたほか、第十六師団が関わった南京虐殺やレイテ戦からの証言が含まれていた。実際には、池田は戦争展の最初の計画者の一人であった他、1986年より京都の戦跡めぐりの案内に従事してきた。池田の考えでは、「これらの「跡」には必ず戦争の狂気や悲劇を伝える」や、「戦争体験のない世代に戦争を疑似体験させてくれ」て、「過去の戦争を今日の平和と戦争の問題に（ついて）考える契機を作っていくもの」であった³⁴⁾。さらに、池田は侵略戦争や加害の面に重きをおくことに伴って、中国に残った日本の戦跡を案内するツアーを1994年に実施した。その際、京都府内からの学校関係者二十五人が南京大虐殺を探る旅を計画し、そこに東史郎も参加していた。同グループが、上海から南京まで旅をしていた際、中国の学者や南京大虐殺記念館の関係者と交流していた。池田はツアーの目的について「過

去の真実を見つめ、反省するためにやってきた。その上に真の友好連帯が築かれる」と語っていた³⁵⁾。加えて、東は「中国の方々より謝罪します」と、南京大虐殺に対する反省的な態度を示した。中国への直接の訪問に加えて、東は中国や台湾、アメリカのマスコミの取材に応じたほか、毎月二、三回程度、日本各地の集会で講演を行っていた。

一方、このように第十六師団関連施設と体験記から、日本の戦争責任を批判的に追求することに対して、右翼や歴史修正主義者から激しい反発があった。その一つとして、東の証言の中で虐殺行為をしたと指摘された人物が名誉棄損を訴え、1994年に東京裁判所で訴訟を起こした。そして1996年に東はこの裁判に敗訴し、再び上訴したが、1998年に却下された。その結果、南京大虐殺の否定説論者や歴史修正主義者が、これらの一連の議論において南京大虐殺そのものがなかった証拠として訴え、大いに喜んでいて。さらに、東の日記を『わが南京プラトーン』（1987年）と題して出版した出版会社の事務所が右翼団体に攻撃されたことから分かるように、東自身は本を出版して以来、右翼から凄まじい脅迫を受けていた。その中で、例えば「刺客を送ったから覚悟しろ」と書いた手紙や、「毎晩のように無言電話」、そして自宅の前に止まっていた右翼のサウンドトラックが一時間にわたって「国賊」と叫び続けたことがあった³⁶⁾。

さらに、1990年代後半に第十六師団関連施設が次々と姿を消していた。特に1999年夏に、聖母女学院が調査もせずに、中島今朝吾や石原莞爾が住んでいた師団長官舎、及び陸軍将校の親睦組織であった偕行社の集会所として使われた、木造二階建ての和洋折衷の建

物を解体した。また同夏に、京都大学の宇治キャンパスで実験室として使われていた旧陸軍宇治火薬製造所の解体計画が決定された。

これらに対し、池田氏と市民団体「戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会」が強く批判し、「深草一帯は、旧第十六師団の関連施設が複数残っている全国でも珍しい地域。その一角が何の調査もされないまま取り壊されるのは残念だ」と話した³⁷⁾。さらにその際に、『朝日新聞』が「歴史の長い京都。戦争遺跡の比重は相対的に軽い」と指摘したほか、府教委文化財保護課の関係者が「明治以降となると、保存へ協力するよう所有者の理解を得るのは難しい」と発表した³⁸⁾。これらを受け、1997年に結成された戦争遺跡全国保存ネットワークは、1999年夏に京都で大会を行い、大会アピールで「戦争体験を持つ人々が高齢化し、生々しい記憶が薄れつつある中で、大切な語り部の役割をになう戦争遺跡、遺構、遺物を調査、保存し、風化、改変、消滅の危機から守ることが緊急の課題となっている」と呼びかけた³⁹⁾。

これらの長い第十六師団の戦後史を受けて、果たしてその関連施設がどうなっていたらだろうか。また、第十六師団の歴史については、実際にはその戦跡現場でどの程度語られているだろうか。2016年によく第十六師団の司令部本館（聖母女学院本館）が国の文化財として登録された。そして、文化庁の国指定文化財データベースでは、その建物について次のように説明されている。

もと陸軍第十六師団の司令部庁舎。長さ六十メートルに及ぶ煉瓦造二階建て、正面中央はイオニア式の大オーダーとペ

ディメントで威厳をもたせ、両翼はトスカナ式意匠とし、屋根に大小のドーマ窓を並べる。内部の階段なども上質。師団司令部庁舎の希少例⁴⁰⁾。

しかし以上の通りこれらの記述は、第十六師団の歴史に一切触れず、建物の外見の説明のみに留まっている。その上、「威厳をもたせ」や「上質」、「希少」などという表現があるように、それが非常に肯定的な捉え方が含まれている。同様に、「京都を彩る建物や庭園」や聖母女学院のウェブサイトにおいても似たような説明が掲載されている。私たち現代人が、具体的に、第十六師団関連施設から何を学ぶべきかについては、これらの端的な説明からは不明である。実際には、このような保存や記憶の仕方は、他の文化財にも確認されている。例えば、2015年に明治期日本の産業革命遺産がユネスコの世界遺産として登録されたものの、公式記述文書ではそれらの関連遺跡が持つ中国人・朝鮮人強制労働の歴史について全く触れられていない。このように、暗部の歴史を完全に除外した形での保存については、ウィリアム・アンダーウッドが「封じられた歴史 (history in a box)」と呼んでいた⁴¹⁾。まさに、今現在の文化財としての第十六師団関連施設にも相応しい名称である。

終わりに

遺産は過去から引き継がれたものである。しかし無批判的に引き継がれるわけではない。引き継ぐ側は常に現在の時点から、現在のニーズに合わせて再評価する。それ故に、ブライアン・グラハムによれば、遺産という

のは「過去を現在のための資源として利用することである」と説明した。同時に、人々は同じように遺産を評価し、利用しようとは限らない。本稿で見てきたように、京都の戦争遺跡は戦後直後に再評価された。ただしそれは過去の戦争の歴史を重視した形ではなく、むしろその当時の用途、すなわち復興のためによって行われた。一方、元第十六師団の関係者や遺族らは戦争遺跡を異なる視点から再評価した。彼らは、忘れられていると感じた元兵士の犠牲をよりよく顕彰するものを求めた。しかしその中で、彼らが用いた手法は戦争遺跡の保存ではなく、記念碑を建設することであった。やがて、第十六師団に属した元兵士の日記などが公表されるようになったことを背景に、京都の戦争遺跡はまた再評価された。そして今度は、市民運動家や歴史家が戦争の「負の部分」、とりわけ南京大虐殺を掘り起こし、後世に伝えるために利用しようとしてきた。しかし負の遺産を記憶し、保存することは決して楽なことではない。何より固定的な自己イメージと噛み合わないことが多い。日本においては、今でも南京大虐殺についての記憶と歴史は激しく議論されている。したがって、それにまつわる遺産は同様の運命をたどっている。

京都の戦跡においても、同様の問題が起きている。戦跡現場において、南京大虐殺についての記述はない。本稿が確認してきたように、その理由の一つは現在まで続いている記憶に関する議論にある。そして京都の戦跡がたとえ文化財として登録されるとしても、おそらく問題解決にはならない。(むしろ悪化させるのみである)。しかし本稿が主張してきたように、もう一つの理由は戦争記憶の暗部で

はなく、現在的な実用的な事柄を中心としてきた京都戦跡の歴史にある。記憶と戦争遺跡の関係性を理解するには、それぞれの地域的な事情や歴史の中に位置づけ検討していることが必要とされている。

参考文献

- 1) 京都市産業観光局。「京都観光総合調査」二〇一七年一月～十二月。https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000240/240130/kyosa29saishu.pdf (二〇二〇年六月一七日アクセス)。
- 2) 「戦争遺跡(へいわをつなぐ:京都発21世紀)」『朝日新聞』一九九九年八月一九日。
- 3) 「負の遺産」については、Rico Trinidad, "Negative Heritage: The Place of Conflict in World Heritage," Conservation and Management of Archaeological Sites Vol. 10, Issue 4 (Nov. 1, 2008):344-352をご参照ください。
- 4) 例えば、モーリス・アルヴァックスは「過去は保存されているのではなく、現在を起点として再構築されているように思われる」と述べた。『記憶の社会的枠組み』鈴木智之訳、青弓社、二〇一八年、一〇頁。
- 5) 高媛「戦前における〈満州〉への修学旅行」『〈新しい日本学の構築〉:お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻シンポジウム』報告書5、二〇〇四年、及び高媛「戦地から観光地へ一日露戦争前後の〈満洲〉旅行」『中国21』二九号、二〇〇八年。
- 6) 一ノ瀬俊也「戦跡と語り:日露戦争の旅順戦跡をめぐる」関沢まゆみ(編)『戦争記憶論—忘却、変容そして継承』、昭和堂、二〇一〇年、一一一頁。
- 7) 福間良明『〈戦跡〉の戦後史:せめぎあう遺構とモニュメント』、岩波書店、二〇一五年、一三一頁。
- 8) Satoshi, Nakano. "The Politics of Mourning" in Ikehata, Setsuho ed. Philippines-Japan Relations. University of Hawaii Press, 2003.
- 9) 吉田裕『兵士たちの戦後史』、岩波書店、二〇一一年、一五四頁。
- 10) 菊池実「戦争遺跡の調査、研究そして保存、活用を考えるために」『明日への文化財』三八号、一九九六年三月、八頁。
- 11) 「虐殺目撃した元兵士の証言」『朝日新聞』一九九五年八月一日。
- 12) 福林徹「軍都伏見の形成と終焉」原田敬一(編)『古都・商都の軍隊:近畿(地域のなかの軍隊4)』、吉川弘文館、二〇一五年。
- 13) 同。
- 14) 東四郎『わが南京プラトーン:召集兵の体験した南京大虐殺』、青木書店、一九八七年、八頁。
- 15) 同、四三一四四頁。
- 16) 下里正樹『隠された連隊史—「20i」下級兵士の見た南京事件の実相』、平和のための京都の戦争展実行委員会、一九八七年、一二五頁。
- 17) 石原莞爾『世界最終戦論』、立命館出版部、一九四〇年。
- 18) 下村實と西野ミヨシ『最後の日記苦悩の中で:第十六師団兵士下村實』、西野ミヨシ、二〇一八年、二四頁。
- 19) 同、三二一三三頁。
- 20) 同、四四一四五頁。
- 21) 同、四五頁。
- 22) 聖母学院『聖母学院二十五年史』聖母学院、一九七四年、一六頁。
- 23) 同、二八一二九頁。
- 24) 同、三二頁。
- 25) 龍谷大学『龍谷大学三百五十年史』第一巻、二〇〇〇年、八〇〇頁。
- 26) 龍谷大学『龍谷大学三百五十年史』第二巻、二〇〇〇年、六頁。
- 27) 福知山市遺族会『平和の礎』山陽中央新聞社、一九五三年。
- 28) 同。
- 29) 現地において筆者による実物の拝見二〇二〇年二月二八日。
- 30) 京都新聞社『防人の詩〈比島編〉—悲運の京都兵団証言録』京都新聞社、一九七六年。
- 31) 同、一一九頁。
- 32) 平和のための京都の戦争展実行委員会(編)『京都の「戦争遺跡」をめぐる』機関紙共同出版、一九九一年、一四三—一四四頁。
- 33) 井口和起、木坂順一郎、下里正樹『南京事件・京都師団関係資料集』青木書店、一九八九年、七頁。
- 34) 同、四五—一頁。
- 35) 「京都第16師団の南京侵攻経路をたどる」『朝日新聞』一九九四年九月一日。
- 36) 「虐殺目撃した元兵士の証言」『朝日新聞』一九九五年八月一日。
- 37) 「写真など記録保存を」『朝日新聞』一九九九年八月四日。
- 38) 「戦争遺跡(へいわをつなぐ:京都発21世紀)」『朝日新聞』一九九九年八月一九日。
- 39) 同。
- 40) 国指定文化財データベース https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/101/00010984 (二〇二〇年六月一七日アクセス)。
- 41) Underwood, William. "History in a Box: UNESCO and the Framing of Japan's Meiji Era," The Asia-Pacific Journal: Japan Focus, Vol. 13, Issue 26 (June 29, 2015).